様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５２０２３９
研究課題名（和文）　古代ロシア文語萌芽期の最終期における言語特性について

研究課題名（英文）　Research on the linguistic characteristics of the Old Russian Literary Language in its last embryonic stage.

研究代表者
岩井　憲幸（IWAI NORIYUKI）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：60193710

研究分野：スラブ文献学・古代教会スラヴ語・洋学・言語学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：古代ロシア語・ルシズム・古代教会スラブ語・ムスチスラフ福音書・アルハンゲリスク福音書

１．研究計画の概要

古代ロシア文語の萌芽期の最終段階あるいは成長期の初期段階を、「イーゴリ遠征物語」出現以前の 12 世紀初頭と措定し、1115 年成立の「ムスチスラフ福音書」のテクストを対象として、その言語的特徴を明らかにする。萌芽期の前・中期における東スラブ語化の個別的・一回的生起からカテゴリカルな生起への変容プロセスが進行していると予測され、この点を特に追求する。

２．研究の進捗状況

(1)　電子化済みの「ムスチスラフ福音書」(Mst)本文の校正作業をほぼ終了した。イーゴリ・フォントに欠けていた文字は新造し、当該箇所を修正した。

(2)　Mst 本文が full aprakos という性質を利用し、マタイ伝およびヨハネ伝について重出箇所を調査・検討した。それにより重出テクスト内での不一致がみられる点が重要であること、ここから、①重出テクストは一方で伝統的 verse を残し、他方で改変形を残す方式が傾向的に認められる。②この改変は menologion 部分に多発する。③改変はキュリロス・メトディオス以来の伝統的用語を、まずカノン内のシノニム・ダブレットを使用して、次にシュメオン帝期ブルガリアの用語で置換するという方式がなされたようにみうけられる。④これはすなわち、釈義とも考えうる。⑤これが進み、東スラブ語独特の言い換えに至った例が存在する。以上から Mst での reduction が明らかとなる。さらに、⑥Mst でのテクスト伝承により、多くのケースで「ユリエフスキイ福音書」への連続性を実証しうる。又、外的には、⑦canon は人工的措定とはいえ、重要であり、tetra と aprakos では語彙論的違いは明瞭である。Mst は「アルハンゲリスク福音書」よりも一段次の段階上にある。⑧「バニシコ福音書」はロシア写本との関連性をほのめかす箇所がある、等を明らかにした。

(3)　Mst 全体の校正作業中、次の問題が未解決として残り、解決につとめた。①小詞ѫѥ を先行の語と続けて 1 綴りとするか否かにつき、統一的な基準を決定することは困難である。すなわちジュコフスカヤらのテクストは、ѫѥ がすべて切り離されているが、これでは索引作成がなしえず、個々に検討せざるをえない。②そのもっとも典型的例として ꙗакоѫѥ の場合があり、結論として、Mst のケースは問題として残った 23 例では、すべて ꙗакоѫѥ 1 綴りと認めてよい。③Mst における ꙗакоѫѥ は、きわめて用法上汎用性が高い。④かかる ѫѥ の問題を解決するために、アレクセーエフらの「スラブ語聖書」、ザリズニャークの小詞論（2008 年）等を参照したが、あまり役立たなかった。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

索引作成作業をのぞいて、Mst のテクスト全体につき、多くの知見をえている。

４．今後の研究の推進方策

本年度は、(1) ѱє の問題につき、一定の解決策を見い出したゆえに、早期に本文訂正作業を行なう。(2) これにより、正順・逆順索引の作成をこころみる。又、本年度は最終年度にあたるので、(3) 秋迄にとりまとめを行ない、各人の知見を文章化した上で、年度末迄に報告書を仕立てる。日本のスラブ学においては、いまだ文献学的研究の蓄積量が質とともに不十分であると考えるゆえに、我々の研究成果を他のスラブ研究者に共有してもらうために、前回迄の我々の科研費報告書作成どおりにこれを作成し、全国の研究者・研究機関に配布したい。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 岩井憲幸、<ѱє >か<-ѱє >か―「ムスチスラフ福音書」における<ꙗакоѱє >の場合―、「明治大学教養論集」、通巻 426 号、pp. 133-175、2009 年、査読無

② 岩井憲幸、「ムスチスラフ福音書」における重出テクストの問題―ヨハネ伝の場合―、「明治大学教養論集」、通巻 426 号、pp. 133―175、2008 年、査読無

③ 岩井憲幸、「ムスチスラフ福音書」における重出テクストについて―マタイ伝の場合―、明治大学文学部紀要「文芸研究」、101 号、pp. 25―42、2007 年、査読無

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

① 服部文昭、林田理恵著『ロシア語のアスペクト』（書評）、「ロシア語ロシア文学研究」、第 40 号、pp. 97―99、2008 年、査読有

② 服部文昭、近代ロシア語誕生への道―東スラヴ族の文章語誕生から近代ロシア語の萌芽まで―、『近代ロシア語萌芽期における動詞時制・アスペクト体系の研究』、pp. 1―14、2007 年、査読無

③ 服部文昭、ロシア語動詞のアスペクトと時制について―近代ロシア語萌芽期にいたる道―、『近代ロシア語萌芽期における動詞時制・アスペクト体系の研究』、pp. 15―32、2007 年、査読無